



優秀賞

書評 川端康成著 『眠れる美女』 改版 (新潮社, 1991)
(中央新書・文庫コーナー: 新潮文庫 か-1-15)

法学部 1年 堀江貴志

「たちの悪いいたずらはなさないで下さいませよ」江口老人は宿の女にそう言われて、ある密室に案内される。密室には深い眠りに落ちた生娘である少女しかいない。少女は揺すったり、叩いたりしても目をさますことはない。江口はその妖しい宿で少女と夜を過ごす。

物語の大部分は江口と少女のいる密室で進んでいく。この小説の特筆すべき点はなんといても、少女の肉体描写にある。一糸纏わぬ姿の少女は頭の前から、足の先まで病的にまで丁寧に、精密に写実される。その緻密な観察の中で少女は「まるで生きているよう」に描かれる。生きながらにして、死んだように少女は眠るのである。

一方で江口は 70 歳の老人。男として機能しないと思われるほどに、老い果ててしまった。だが江口は少女を通して、まるで若かった頃の自分に回帰するように、過去の女性との記憶を思い出す。老人は過ぎ去りし生を辿りながら、刻一刻と死に近づいていく。

この 2 人の生と死、死と生の対立という構造と、官能さを感じさせることのない無垢な少女の肉体描写にみられる文章美は、もはや芸術の域に達している。しかし、社会的な意義・啓発はそこにはない。ただ、あるものは美のみである。

川端康成は、様々な技法や表現、語彙によって、文章や構成、題名における価値の頂点に美をおいた「眠れる美女」を完成させたのである。そのことを三島由紀夫は、本書の頹廢的な描写から「デカダンス文学の名著」と評している。いわば、本書は小説というプラットフォームで芸術として昇華することとなったのである。

さて、今まで私たちが義務教育で習ってきた読書とは、テキストを読むことを通して、著者の主張を見つけ出す作業であった。本を読んだら、どのような意味が込められているのか、著者は何を伝えたかったのか、を見つけ出さなければならないのである。そこには読者の自由な発想が入り込む余地はない。だから、読書とは「頭の痛い」作業として幼い頃から刷り込まれ、俗にいう「活字離れ」を助長していったのである。

そのような現代において、本書は大変よい薬になるだろう。常にテキストに意味を求め続けていた私たちに良い意味で無意味な、純粹な言葉それ自体の美麗さと、自由にそれを楽しむ喜びを教えてくれる。そして、そのようにして小説を楽しむことが読書の醍醐味の一つだろうと私は思う。